

イベントトピックス

ふたば「もちつき大会」

1月10日、おもちつきを行いました。はじめに、お母さんたちに餅をついてもらおうと「面白い!」「意外と重たい!」などの声があり、とても楽しまれている様子でした。次に、子どもたちに餅をついてもらおうと、不思議そうな表情を浮かべたり、一生懸命杵を持ち上げようとする姿が見られました。少しの時間でしたが、普段味わうことのできない経験ができ、貴重な時間を過ごすことができました。



わかば「パルンタインチョコケーキづくり」

2014年2月17日(月)

2月といえば節分ですが、今年はお母さんたちも一緒にチョコケーキづくりを行いました。板チョコを溶かし、その中に串に刺したカステラをフオンデユして、色鮮やかなトッピングを施し、見た目にもかわいいチョコケーキの出来上がり!チョコの香りが漂う病棟の中で、あま〜い香りとともにお母さんと一緒にケーキ作りを楽しみることができました。



感謝

大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

一般寄付金と寄付物品

月	寄付者(敬称略)	月	寄付者(敬称略)	月	寄付者(敬称略)	物品名
12月分	真鍋和雄・貴広	12月分	匿名 楽基金 12月分	12月分	学校図書館によい本いっぱい運動推進連盟	児童図書 多数
	廣江惇朗		株万代(クリスマス用品購入金)			
	時安眞智子	1月分	ダイセル労働組合本社支部	1月分	早川電気通信株式会社	カラープリンター 2台
	土井照夫		藤井真希			
廣田和子	2月分	国際ソロプチミスト大阪-中央	2月分			
愛徳姉妹会		楽基金 1月分				
馬場則子		楽基金 2月分				
	南田辺民生員・児童委員協議会					
	東住吉区民生委員児童委員協議会					

職員研修実施状況

H25年9月~H26年3月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成25年12月5日(木) 17:30~18:30	経営会議	センターの療育理念 ポバースコンセプトを基本として	梶浦一郎 理事長	83名	5階ホール
平成25年12月13日(金) 17:30~18:30	経営会議	脳性麻痺児者の基礎的理解とポバースアプローチ	鈴木 恒彦 センター長	85名	5階ホール
平成25年12月18日(水) 17:30~18:30	経営会議	どうして当センターは保健文化賞を受賞できたか?	船戸正久 園長	70名	5階ホール
平成25年12月25日(水) 平成26年1月9日(木) 13:00~14:00	ME企画	非侵襲的排痰補助装置 カフアシストE70	フィリップス 職員	12月25日 30名 1月9日 10名	5階ホール
平成25年12月27日(金) 14:00~17:15	教育研修部	研究発表5題 委員会報告「インシデント報告」 講演1「禁煙に対する正しい知識と禁煙治療について」 講演2「重症心身障がい児の呼吸に関連する問題について」	発表者5名 介護療育部 安瀬美紀 ゆうなぎ園 東野祐基 地域医療連携部 前田好亮 リハビリテーション部 松井吉裕 医療技術部 橋本匡俊 セフティマネージメント委員会 高瀬時義 講演1 運営局 山野洋一 講演2 小児科部長 竹本潔	192名	5階ホール
平成26年1月15日(水) 17:30~18:30	経営会議	センター職員の専門性と心意気	市村由美子 運営局長	98名	5階ホール
平成26年1月31日(金) 18:00~18:45	リハ部・看護部	摂食に関する事例を振り返る	わかば看護師 岩本美都里 リハ部ST 北山千晶	40名	PT室
平成26年2月4日(火) 17:30~18:30	感染管理委員会	医療従事者の健康管理 -感染症対策を中心に-	感染管理委員竹本小児科部長 株式会社SRL	58名	5階ホール
平成26年2月18日(火) 17:30~18:30	教育研修部	在宅で生活することを決意して -総合病院から在宅生活へ、そして看取り-	藤井真希先生	112名 (外部から23名)	5階ホール
平成26年2月28日(金) 18:00~18:45	リハ部・看護部	なでしこ 通園事業における食事のとりえ方	なでしこ介護福祉士 山口一平 リハ部PT 河中真由美	45名	PT室
平成26年3月4日(火) 17:30~18:30	栄養委員会	重症心身障害児者の栄養	小児科医長 飯島禎貴先生	延期	5階ホール
平成26年1月24日(金) 17:30~19:00	教育研修部	スーパーバイズによる事例検討会①	服部祥子先生	63名 (内、外部2名)	5階ホール
平成26年2月22日(土) 15:00~16:30	看護部	看護部・介護療育部研究発表会	発表 4F 鎌田 他	41名	5階ホール
平成26年3月10日(月) 17:30~19:00	教育研修部	スーパーバイズによる事例検討会②	服部祥子先生	54名	5階ホール
平成26年3月18日(火) 17:30~18:30	HPS	HPSイギリス研修報告	HPS 市川主任 HPS 福岡 他	41名 (外部から1名)	5階ホール

外部受け入れ研修

平成26年3月7日(金)~14日(金) 9:00~17:00	教育研修部	関西医科大学医学部 地域医療実習	研修責任者 船戸園長	2名	センター および訪問
--------------------------------	-------	------------------	------------	----	------------



大阪発達総合療育センター

URL : <http://osaka-drc.jp>
 発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会
 発行責任者・梶浦一郎

【保険医療機関】 南大阪小児リハビリテーション病院
 〒546-0035 大阪市東住吉区山坂 5-11-21
 TEL 06-6699-8731 FAX 06-6699-8134

【併設施設】 ●わかば 医療型障がい児入所施設(主として肢体不自由児)
 ●ふたば 児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業
 ●フェニックス 医療型障がい児入所施設(主として重症心身障がい児) 療養介護事業・重症心身障がい児 短期入所
 ●なでしこ 生活介護・児童発達支援事業
 ●めぐみ 訪問看護ステーション
 〒546-0035 大阪市東住吉区山坂 5-11-21 TEL 06-6699-8731 FAX 06-6699-8134
 ●あさしお園 児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・放課後等デイサービス
 ●ゆうなぎ園 児童発達支援センター(主として難聴児) 保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業
 〒552-0004 大阪市港区夕風 2-5-3 TEL 06-6574-2521 FAX 06-6574-2524

葎

大阪発達総合療育センター機関紙
 第13号 平成26年3月
保健文化賞受賞特集号

社会福祉法人 愛徳福祉会 大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center
 保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

さらに前へ

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長
梶浦 一郎



昨今、わが国は大きな自然災害と偽装問題、外国からの強圧に揺れました。幸い我々のセンターでは激しい変革期を経て、これまでの仕上げと発展期に入っていた年だったと思います。

昨年、当センターを見学に来られた施設、または依頼された講習会・講演などは、見学31件、海外3件、看護48件(うち訪問看護10件)、POST31件、歯科4件、その他大変な数になりました。特に最近では重心のショートステイ、NICU後方支援など、在宅に関することが多い事は、ニーズは高いにも関わらず、実行が非常に困難な活動で、それを実行しているセンターの実績が目ざされているからであると思います。NICU後方支援は、厚生労働省のモデル事業としても取り上げられ、やがて手本として広まっていくことと思います。

職員の皆様には今後も大変ご苦労かけるとは思いますが、宜しくお祈りします。非常に活気に溢れ、生き生きと働いておられる姿を見て、本当に心強く思います。ベッド稼働率も上がり、年末には外来患者数が目標値の1日200名を超えました。しかし、このように順調にいっている時こそ慎重に常に反省を忘れず、さらに前へ前へと進まなければなりません。無理なお祈りをするかもしれませんが、宜しくご協力をお願いします。

特集によせて

大阪発達総合療育センター センター長
鈴木 恒彦



この度、当センターが「1970年の創立以来、脳性麻痺に対する0歳からの積極的医療や在宅療養の推進、さらにポバース法によるリハビリテーションの導入は、日本の療育分野に大きな貢献をしている」として、第65回保健文化賞を受賞できたことは、当法人の創立以来の障がい児者の方々への地道な医療福祉活動が、改めて全国的評価をいただいたことを意味します。梶浦理事長の指揮の下、長年これまで携わってこられた多くの先輩・先達の方々に改めて敬意を表し、日夜療育支援に奮闘している現在の職員諸氏のご努力に感謝申し上げます。権威ある「保健文化賞」の歴史は、戦後の混乱期、保健衛生の思想や施設が悪化している中であって、それらの向上に取り組む人々に感謝の意を捧げるために1950年に創設され、1959年から受賞者の方々は天皇皇后両陛下の拝謁の栄誉を賜ることになったそうです。時代の趨勢とともに多岐にわたる分野の団体・個人の方々がこれまで表彰され、受賞が契機になって保健文化都市宣言をした街(1963年足利市)もあると伺いました。我々も今回の栄光を糧に、誇りと自信をもって今後の療育センターの更なる発展に努力し、社会的使命を果たして参りたいと考えます。



「どうして当センターが保健文化賞を受賞できたか？」 保健文化賞を受賞するまでの経緯

大阪発達総合療育センター 副センター長 船戸 正久
南大阪小児リハビリテーション病院 病院長



2013年12月18日、職員研修会において「どうして当センターが保健文化賞を受賞できたか—温故知新」というテーマでお話をさせていただきました。その内容に沿って受賞するまでの経緯を紹介させていただきます。

1. 応募の経緯

梶浦理事長から2013年初め保健文化賞応募書類が回されてきました。当センターに赴任してまだ2年目の私が、応募書類を書くことに幾分躊躇を覚えたのですが、今まで梶浦理事長や先達たちがこのセンターで障害をもたれた方々のためにやってこられた数々の業績を耳にしていたので、ダメ元でトライしようと決心しました。それで「南大阪療育園創立40周年記念誌」やリハビリテーション部彦田氏からDVDや文献・資料をお借りし、温故知新でまずセンターの歴史を学ぶことから始めました。その結果1970年の創立当時から療育に関する多くの斬新的な試みをされていたことが良くわかりました。それで当センターの活動の概要を次のように紹介をしました。

2. 活動概要

当施設は、創立以来肢体不自由児に対する「(1)施設収容よりも在宅療養、(2)脳性麻痺に対する積極的な医療、(3)脳性麻痺の療育は0歳から」という先進的な基本理念を基に日本に初めて「ボバース理論」を紹介し、それを基礎においた積極的な医療・療育を行っています。また創立当初から障害児歯科を設置し診療を行いました。現在脳性麻痺の積極的な整形外科の手術に加え、大阪でも有数なボトックス(ボツリヌクス毒素A)治療センターの役割を担っています。また当施設で開発した側弯矯正器具「プレーリーくん」は、その評判を聞き大阪以外の地区からも多数の患者さまが受診に訪れています。

重症心身障害児施設を併設した現在、当施設の活動理念は、「私たちは障がいを持つ人々が地域においても安心して生活できるように総合的支援を実践いたします」です。この理念にあるように、当施設は、医療型障害児入所施設(療養介護も含む)としての役割だけでなく、とくに医療的ケアが必要な重症児者の地域生活支援を視野においた活発な活動を行っています(児童発達支援・生活介護・ショートステイなど)。とくにショートステイ(短期入所)は、西日本で最も多い年間登録数・延総利用日数を占めています。さらに超・準超重症児などNICU長期入院者への在宅移行支援、さらに移行後の支援のために訪問看護ステーションを開設し、訪問看護・訪問リハに取り組んでいます。新たに家族が在宅で必要とする医療的支援のために在宅療養支援病院を取得し、訪問診療・往診も開始しています。

3. 授賞の理由

当センターが授賞の理由として、とくに評価を受けた活動内容は次の3点です。

- 1) 肢体不自由児の在宅療養推進、脳性麻痺に対する積極的医療・療育
- 2) ボバース理論を土台とした包括的リハビリテーションの導入
- 3) 医療的ケアが必要な在宅重症児の多職種による地域包括的支援

4. 評価を受けた具体的な活動内容

これらの具体的な活動内容について示します。

- 1) 肢体不自由児の在宅療養推進、脳性麻痺に対する積極的医療・療育
肢体不自由児施設は当時施設収容が普通でしたが、当施設は創立当時から在宅療養を目指し活動を開始しました。また脳性麻痺に対

する積極的医療、0歳からの療育を提唱し、日本の小児保健や療育分野に大きな影響を与えました。現在こうした考え方は、日本の医療・リハビリテーション分野で普遍的考え方として広く理解され浸透しています。

2) ボバース理論を土台とした包括的リハビリテーションの導入
英国のボバース夫妻により提唱されたボバース法を、小児脳性麻痺のリハビリテーションに日本で初めて紹介導入しました。ボバース夫妻を招待し、広くこの方法を日本に普及すると同時に、直接英国での学びのために職員を派遣しました。その後英国の承認を受けボバース法講習会を毎年開催し、日本と近隣諸国の多くの施設から研修者を受入れ修了者を送り出しています。また適正な保険点数の導入にも大きな貢献をしました。

3) 医療的ケアが必要な在宅重症児の多職種による地域包括的支援
(1) ショートステイ(短期入所)の積極的な受入れ
2006年に大阪市の委託により重症心身障害児施設を開設して以来、現在の活動理念の下で25%(通常5%)のショートステイ(短期入所)のベットを確保し、家族のレスパイトケアを含んだ重症児(在宅人工呼吸器を含む)のショートステイを積極的に受入れ、現在西日本で最も多い登録数となっています。

(2) 訪問看護・訪問リハの推進、訪問診療の開始
重症児の在宅生活支援の一環として訪問看護ステーションを立ち上げ、重症児ケアに精通した訪問看護師・訪問リハスタッフ(PT・OT)は派遣し、医療的ケアを含む看護支援・生活リハ支援を行っています。さらに2012年から医師チームによる訪問診療・往診も始めています。

(3) NICU(新生児集中治療室)の後方支援、在宅移行支援プログラムの導入
NICU長期入院児(とくに超・準超重症児)の後方支援のために、多職種協働で行う「在宅移行支援プログラム」を作成しました。このプログラムを基に大阪NMCS(新生児診療相互援助システム)病院と協働して在宅移行支援を行っています。

5. 多職種協働による総合支援

これらの活動は一人の力では到底無理で、ご本人とご家族のニーズを中心に良いチームワークでそれぞれの専門職が支援する多職種協働の結果が総合評価されたものと思われます。今後も当センターのこうした良い点を理解し誇りにし、ご本人とご家族のニーズにプロとして対応できるスキルとマインドの研鑽に努めていただきたいと願います。



「保健文化賞受賞を祝う会」 を行いました。



Dio & Syugaさんのミニライブ

大阪発達総合療育センターでは、昨年10月23日(水)、第65回保健文化賞贈呈式(ホテルオークラ東京)で、他の8団体・個人5名と共に、厚生労働大臣賞、第一生命賞、朝日新聞厚生文化事業団賞、並びにNHK厚生文化事業団賞が授与されたことを記念し、12月10日(火)、17日(火)の両日、センター5階ホールで、「祝う会」を開催しました。

保健文化賞は、保健医療や高齢者・障がい者の保健福祉の分野で顕著な実績を残した団体・個人に贈られ、受賞者は翌日皇居で天皇・皇后両陛下の拝謁を受けるなど、この分野では最も権威ある賞この受賞を、全職員が出席して祝おうとの考えから2回に分けて開催しました。

祝う会は、受賞の経緯を含めた開会の言葉の後、センターの創設から今日まで中心となって導いてこられた、梶浦一郎理事長の挨拶に始まり、この贈呈式の写真やビデオ鑑賞、来賓の紹介と祝辞、保健文化賞の主催者第一生命株式会社様からの祝電披露、「当センター40数年の軌跡」のスライドショー、当センターに大きな貢献をされた紀伊克昌様と児玉和夫様への感謝状贈呈、全職員による園歌斉唱、そして最後にミニコンサートと、盛り沢山のプログラムと、栄養科と調理職員による豪華な食事・デザートとで、2時間余の楽しい会をもつことができました。

ここに、保健文化賞贈呈式で全受賞者を代表して挨拶をされた、梶浦一郎理事長の謝辞全文を掲載いたします。

「ご紹介いただきました社会福祉法人愛徳福祉会理事長の梶浦一郎でございます。僥越ではありますが、受賞者を代表いたしまして御礼のご挨拶をさせていただきます。

本日、第65回保健文化賞を授与されましたことは、この上ない荣誉であり、大きな喜びとするところであります。この保健文化賞は保健衛生福祉分野で歴史と権威ある賞であると同っておりますが、主催の第一生命保険株式会社様、ご後援の厚生労働省様、朝日新聞厚生文化事業団様、NHK厚生文化事業団様に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

また、本日の盛大な贈呈式では、田村憲久厚生労働大臣様を始め関係の皆様方から身に余るご祝辞をいただき感激しているところであります。さらに明日は、受賞者一同で皇居に参内し、天皇・皇后両陛下のご拝謁を賜りますこと、この上ない名誉であり、また無上の喜びとするところでございます。

今回の栄えある保健文化賞受賞に至りますまで、ご推薦を賜りました各団体様にも、この場をお借りして、御礼申し上げます。ご推薦、誠にありがとうございました。

私ども愛徳福祉会・大阪発達総合療育センターは昭和45年に「聖母整肢園」として開設以来、英国からボバース法を導入して、我が国で初めて脳性小児まひの0歳からの早期治療を開始しました。以来、障がいのある人々が地域において安心して生活できるよう支援することを基本理念としています。現在肢体不自由児や重症心身障がい児・者を対象にした病院機能を持つ施設・通所事業を運営し、更に訪問看護・訪問診療にも挑戦しているところであります。また、脳性まひをはじめとする多くの障がい児・者にみられます脊柱変形の保存的治療を目的とする新しい体幹装具(愛称プレーリーくん)を開発し、その効果について、国内だけでなく昨年9月にスウェーデンの首都ストックホルムで開催された欧州神経学会議での発表を始め、アラブ首長国連邦(ドバイ)・カナダ(トロント)・アメリカ(シカゴ及びオーランド)、台湾などの医学会議で発表し注目を集めております。また今年度は、厚生労働省の「重症心身障がい児者の地域生活モデル事業」にも取り組んでいるところであります。

これからも、本日の受賞の意味と責任を重く受け止め、在宅の障がい児・者を支える使命を果たしていくと共に、全国の肢体不自由児施設、重症心身障がい児者施設、そこで働く多くの職員と力を合わせ、医療・福祉の向上に寄与していく所存であります。

本日は本当にありがとうございました。」
(なお、保健文化賞贈呈式については、翌10月24日の朝日新聞朝刊に掲載されました。)

国際側弯症研究会 第48回年次集会・研修会

Scoliosis Research Society
48th Annual Meeting & Course

に参加して

大阪発達総合療育センター
センター長

鈴木 恒彦



梶浦理事長が開発された動的脊柱装具(DSB)の、側弯症研究における位置づけを確認するために、9月18~21日フランスのリヨンで開催された国際学会に参加しました。4日間で延2000名以上の参加者があり、特発性側弯症を中心として基礎的研究から最新の手術機器や手術法まで、脊柱変形に関連する広範な分野が網羅された大規模な学会でした。ギブスや装具による保存的療法と、脳性麻痺等の基礎疾患に伴う側弯変形に対する手術療法のセッションに参加しましたが、いずれもX-PやCT、MRI等の厳密な画像計測に基づく側弯変形の改善と、外表の容貌改善、座位保持の安定性が主流の評価で、ADL等の評価は客観性が乏しい部分として、避けられている印象でした。代表的な脊髄専門医(整形外科と脳外科)の先生方にロビーでお聞きした範囲では、「自分たちの専門は脊柱変形を可能な限り生理的アライメントに戻すことなので、…」、ADL等の重要性は認識しているものの専門外ということでした。カナダから動的脊柱装具の概念に類似した特発性側弯症に対するコンピューター計測に基づく装具療法の発表があり、今後の脊柱変形に対する治療の方向性として、やはり脊柱の矯正固定と柔軟性確保の間のジレンマが大きな課題と思えました。DSBは、今後の脊柱変形の治療概念に一石を投じる装具療法の様な気がしました。